

アジアのオルタナティブツーリズム研究プロジェクト —コロナ禍における中部地方のインバウンド観光地—



澁谷 鎮明 SHIBUYA, Shizuki

国際関係学部・教授

中部大学国際関係学部国際学科教授

名古屋大学大学院文学研究科史学地理学専攻満期退学。博士（地理学）。専門は人文地理学、韓国地域研究で、韓国を中心とした風水地理思想の展開、日本人作成の近代都市図研究に関心を持つ。近年中部地方のインバウンド観光についても研究を行う。

ABSTRACT

This year, in this project, we tried to leave a record of inbound tourist in the Chubu region during the corona crisis. As an example, I picked up Hida Takayama, which is visited by many foreign tourists from various countries in the Chubu region. In the wake of the 2011 Great East Japan Earthquake, foreign tourists traveling in Japan had a hard time due to lack of information. In Hida-Takayama, which was hit by the corona crisis, there was no major confusion, and travelers were "Quiet retreat". Many travelers quietly moved to big cities with airports on schedule, and there were no more foreign tourists in Takayama.

1. はじめに

本研究プロジェクト「アジアのオルタナティブツーリズム研究プロジェクト」は、本来中国内モンゴルや、マレーシアのペナン島をフィールドに、現地研究者と協力の上、新たな観光資源の可能性を追究することで、さまざまな観光に関わる問題について考察しようとするものであった。しかしながら、折からのコロナ禍により海外での現地調査が難しくなり、昨年度に引き続いて国内、特に中部地方の研究を行うこととした。具体的には一昨年一部実施していた、コロナ禍における中部地方のインバウンド観光地の状況について記録するべく、調査研究を行った。この際に、コロナ禍以前に筆者が調査を行ったことのある岐阜県高山市の状況を事例とした。現在のところ調査途上であるので、ここでは中間報告的な内容としたい。

2. 中部地方のインバウンド観光地：飛騨高山の事例

中部地方にはインバウンド客に人気のある複数の観光目的地があるが、岐阜県高山市は、周知のように、インバウンド観光の最も著名な目的地として知られている。コロナ禍以前に高山を訪れると、外国人客の多さに驚くほどであった。『高山市観光統計』を見ると、2011年頃には、宿泊者ベースで外国人客全体の5-6%を占める程度であったものが、一時期は20%を超えていた。2019年には外国人宿泊者数が60万人を超えている。

高山を訪れる外国人客の国籍は、台湾やタイをはじめとしたアジアからの観光客が多いものの、北米、ヨーロッパ、オーストラリアからの観光客の占める割合も比較的高く、「バランスが取れた」状態と言えるかもしれない。またこれまで、アジア系の観光客はバスツアーが多く、北米・ヨーロッパ・オーストラリアからの観光客は個人客が多い傾向があり、高山は団体客と個人客が集中する場所であったとも言えるだろう（澁谷、2014）。ただ近年ではアジア系の個人客も見られるようになった。また他地域に比べ、訪日客の多い中国、韓国からの訪問客が少なめである。

個人客が良く使う、著名な英語版のガイドブック『Lonely Planet』等には、「高山の特徴は、・・・伝統的な魅力がよく保存された都市」であり、「中部地方の旅行で、高山は必ず行か

なくていけない場所の一つである」とされる（澁谷、2014）。このような内容と沿うように、外国人客が多く宿泊するゲストハウス等の宿泊施設のラウンジに置かれ、旅行客の思い出が記される「ゲストブック」には、「日本旅行のハイライト」「日本のベスト・プレイス」などの高い評価がうかがえる。また「京都・東京などの混雑した、忙しい大都市に比して「オアシス」である」との説明も見られ、訪日客の集中する地域であった（澁谷、2017）。

3. コロナ禍のインバウンド観光の記録

このようにインバウンド客の評価が高く、訪問者もきわめて多い飛騨高山では、コロナ禍が始まった頃、どのような状況になったのであろうか。2011 年の東日本大震災の際には、日本国内で外国人観光客に情報が行き届かずに混乱が見られたと聞く。しかもコロナ禍の始まった2020年1-2月頃は、本来台湾、香港、中国本土からのインバウンド客が増加する季節であった。

しかし、高山の観光関係者によれば、この時期にコロナウイルスの感染状況が観光客に伝わったものの、特段の混乱は見られなかったという。特に個人客の場合、むしろ各々の予定通りの日程で高山を出発し、予定の帰国便を目指して空港のある大都市に移動していったとのことである。大都市に移動後の状況は今のところ不明ではあるが、外国人個人客は徐々に高山を絶ち、いなくなっていくという、いわば「静かな撤退」が起こっていたとのことである。ごく少数、自身の国の水際対策が急に厳格化したことから、帰れなくなりしばらく高山に滞留した例もあると聞くが、基本的には、混乱を引き起こすことなくいなくなっていく状況であった。

外国人個人客のよく利用する宿泊施設の関係者によれば、その後次第にキャンセルが入り始め、3月には宿泊客が途絶え、この後長く開店休業状態になったとのことである。具体的な統計での確認ではないが、いわゆるゲストハウスはこの後撤退、休業が相次いだ模様であり、旅行サイト「Trip Adviser」に掲載されていた11軒のうち現在残っているものは5軒とのことである。昨年10月より外国からの個人客が入国できるようになり、次第に宿泊客は現れ始めている。ただこれらのゲストハウスのうちドミトリーのあった宿は、「密」な状態を気にして個室化すると一般のホテルとの価格競争にさらされることから、ドミトリーのベッド台数を減らすなどの対応を行うなどさまざまなイレギュラーな対応に迫られている。

4. まとめ

このような記録を残してはどうかと考えたのは、上にも述べたが、2011年の東日本大震災の際には、日本国内で外国人観光客に情報が行き届かずに混乱が見られたと聞く。緊急時、災害時に観光客、特にインバウンド観光客は弱い立場に置かれがちである。持続可能な観光を考える上でこのような安心・安全の問題は重要であるだろう。今後もこのような記録についての調査研究を進めたい。

【参考文献】

- 新井直樹（2021）：日本の国際観光政策の変遷と動向―コロナ収束後の持続可能なインバウンド観光振興にむけて―、奈良県立大学研究季報 32-3、pp.1-45
- 澁谷鎮明（2014）：ふたつの高山―海外からの団体ツアー客・個人客の視点と観光行動―、貿易風 9、pp.234-237
- 澁谷鎮明（2017）：宿泊施設の「ゲストブック」を用いた訪日個人客の観光行動の多様性と観光地評価の変化に関する研究：岐阜県高山市の事例、貿易風 12、pp.124-135